

日本のポップカルチャー精神の源流を訪ねて

Visiting the Source of Japanese Pop Culture Spirit

イルマ・サウインドラ・ヤンテイ

ILMA SAWINDRA JANTI

1. はじめに
2. 元禄文化: 日本のポップカルチャーの原点
3. 国風文化: 日本の文化的感性の創生
4. 本居宣長の「物のあはれ」論
 - (1)『源氏物語』と「物のあはれ」
 - (2)「真心」と「女々しさ」
5. 結びに代えて

1. はじめに

日本は最先端の科学技術立国であり、他のアジア諸国をリードしている。したがって、来日する多くのアジア人留学生が学ぶのは、おもに日本の科学技術である。私の母国インドネシアからも多くの留学生がこれまで来日しているが、彼らもまた日本で学ぶのはおもに理系の分野であった。国内企業を発展させ、自国の経済成長を促すためには、先端の科学技術の習得の導入が重要であるとインドネシア政府が考えてきたからである。

他方で、トヨタ、ホンダ、マツダなどの自動車メーカーやソニー、ナショナルなどの家電メーカーは、積極的にアジア諸国に進出し、製品を売るだけでなく、各地に生産拠点を設けてきた。こうした日本企業の進出と日本製品の氾濫に対する反発が 1970 年代になるとアジア各地で生じるようになる。インドネシアでも 1974 年にジャカルタで Malari 事件と呼ばれる反日暴動が起きた¹。アジアの人びとは、戦前の軍事侵略に代わる「経済侵略」を日本企業の進出に見て取ったのである。あるいは、日本文化抜き日本製品の氾濫に恐怖を覚え

たのかもしれない。この反日暴動の後に、日本国際交流基金は、文系の研究者をジャカルタに派遣して日本文化を教えるようになった²。また、それを契機に日本文化を学ぶために来日するインドネシア人留学生の数も増えてきている。

最近では、日本の伝統文化だけでなく、現代日本で流行しているマンガやアニメなどのポップカルチャーもインドネシアに多く入ってきている。日本文化に興味がある人や、日本語や日本文化を学ぶ学生だけでなく、一般の若者たちが日本のアニメやマンガに興味を持っているのである。コスプレに関心をもつ若者たちもいる。

日本発のマンガやアニメは、アジアだけでなく、いまや世界的に一部の若者たちの注目を集めている。日本の外務省もこうしたポップカルチャーを通じた文化外交に着目しており、「〈ポップカルチャー〉をテーマにした文化外交の実施は、我が国に対する支持者を拡げていく上で、高い効果が期待される」と述べ、「ポップカルチャーへの関心をどのように日本への関心に高めるか」、また「ポップカルチャーを推進している産業界に対して外務省がどのような協力を行うべきか」が今後の課題であるとしている³。

日本文化、特に日本の古典文化を学びに来日した私にとって、こうしたマンガやアニメなどの現代日本のポップカルチャーの精神的源泉がどこにあるのかは、長らく気にかかっていたことであった。というのも、その波及力の強さからして、それが根の浅いものとは思えなかったからである。世界的に受容されているポップカルチャーが現代日本に花開いたのはなぜか、その精神的土壌は何かを問うことが本論の出発点となる。

ポップカルチャーには、ポピュラーという語のもつ二義性を認めることができる。すなわち、一方でそれは大衆文化であり、そのコンテンツは不特定多数の大衆に享受され消費される。したがってポップカルチャーの背景には、ある程度発達した商品経済と、そこにおける大量生産、大量消費行動がある。ポップカルチャーのコンテンツは往々にして商品として流通され、消費されるものである。他方で同時に、ポップカルチャーは流行しているものである。それは先端的であるがゆえに人びとの耳目を集め、「人気のある」ものである。伝統文化やハイカルチャーとは異なりポップカルチャーの享受には特段の修練を必要としない。すなわちその魅力は直接的であり、感性的である。その表現は常に新しく新鮮であるということがポップカルチャーの特徴となっている。だが、どれだけ斬新であろうとしても、それが感性的なものである以上、ポップカル

チャーのコンテンツは次第に陳腐になって廃れるか、あるいは権威化されてハイカルチャーに移行する。そしてまた人びとの感性を刺激し、多くの支持を集める新たな表現が生み出されていく。本論が注目するのはこのポップカルチャーの后者の側面であり、社会において繰り返され、ポップカルチャーという現象を更新していくこの特有の運動である。本論の目的は、18世紀の国学者本居宣長の「物のあはれ」論に、このポップカルチャーに特有の運動の定式化を見出すことができるということ論を論じていることにある。

次節で、江戸時代初期の元禄時代に日本のポップカルチャーの原点を求め、その後、元禄文化以後に活躍した本居宣長の議論の中に、ポップカルチャーを不断に生み出す日本人の感性の特徴を見ていく。

2. 元禄文化：日本のポップカルチャーの原点

本居宣長は、1730年（享保15年）に現在の三重県である伊勢国に生まれた。彼が生まれる約30年前には、上方を中心に花開いた元禄文化が終焉を迎えている。元禄文化は、経済の発達や社会の安定そして庶民階級の驚くべき識字率の高さを背景とする都市居住者中心の文化であり、この頃の主な文芸ジャンルとしては、井原西鶴の『好色一代男』などの浮世草子、近松門左衛門の『曾根崎心中』などの文楽、松尾芭蕉を代表とする俳諧、歌舞伎などがあり、美術では琳派の祖とされる尾形光琳や俵屋宗達などが有名である⁴。

元禄文化は、支配階級である武士のみならず被支配階級である商人や職人にも経済的な余裕が生まれ、購買力が高まったことによって活性化された文化であった。日常的に芝居小屋に通い、浮世草子を買って求め、あるいは貸本屋に赴き、俳諧や長吟を楽しむ人びとの数が一定数に達していなければ、文化として成熟することはありえなかったであろう。同時にコンテンツの供給側も、増加する受容に応じて流通や生産の環境を整えていった。寺社や武家に独占されていた木版印刷技術が民間で使用されたことで、浮世草子や黄本がベストセラーとなりえたのである。また、本居宣長の時代には、それまで手書きが主流だった浮世絵にも木版印刷が導入され、庶民が手に入れることができる安価な大量生産品となっていた。

浮世草子や浮世絵の「浮世」という言葉は、「現代風」ということを意味していた。すなわちそれらは、当時の人びとの生活や心情を取り入れ、そこに新

たな表現を加えて人びとの感性を刺激したことで、多くの支持を集めたのである。商品経済の発達と技術革新を基盤として、新鮮な表現によって不特定多数の人びとに享受されていたという点で、元禄文化に端を発する江戸時代の文化コンテンツは、まさに日本にポップカルチャーの原点であるといえる。よく知られているように、浮世絵は、その独特の構図と色調が評価され、19世紀後半にフランスを中心にヨーロッパでジャポニズムと呼ばれムーブメントを引き起こしたが、こうした伝播力の強さにもまた、現代日本のポップカルチャーに通じるものを見出すことができる。

本居宣長は、日本において当時ハイカルチャーの地位を占め続けていた儒学や漢学を日本の精神風土に異質の外来文化であるとし、日本に固有の文化的感性を定式化しようと試みた国学者であった。だが、その際に彼が参照したのは、当代の人びとに広く支持されていた文芸作品ではなく、平安時代の女流文学であった。宣長は何よりも紫式部（973－1014）の『源氏物語』を日本人の感性と美意識の原風景として選び出したのである。

3. 国風文化：日本の文化的感性の創生

紫式部は、平安時代中期から末期にかけて発達した国風文化に属している。国風文化とは、宮中の女性たちをおもな担い手とした宮廷文学を中心とする貴族文化であり、その発展のきっかけの一つは894年の遣唐使の廃止とそれによる中国文化の影響の漸次的減少である。

古代日本の文化形成に中国文化、特に漢文の果たす役割は大きかった。漢文は、儒学や仏教などの中国伝来の学問や思想を習うために用いられていたが、その習熟が難しく、また微妙な感情表現にも適していなかった。平安時代に入ると、それまで漢字で表現されていた万葉仮名を省略した片仮名が考案され、また万葉仮名をくずして書く平仮名も用いられるようになった。このようなかな文字は女手と呼ばれ、おもに女性のあいだで用いられていた。音と表記が一致しており、文字数も限定されていたので、その習熟が容易であったからである。このかな文字の発達こそが国風文化の基礎となったのである。

「をとこもすなる日記といふものを、をむなもしてみむとてするなり」という一節から始まる『土佐日記』は、土佐国（現在の高知県）の国司だった紀貫之が、任期を終えて京に変えるまでの55日間の紀行を短歌を交えて綴ったも

のである。紀貫之は「男性が書いている日記というものを、女性である私も書いてみよう」として、女性の用いるかな文字で紀行文を書いた。『土佐日記』は日本文学史上初の日記文学であり、その後のかな文字表現の道筋をつけ、『蜻蛉日記』『和泉式部日記』『紫式部日記』『更級日記』などの平安時代の女性たちによる日記文学の興隆に大きな影響を与えた。

紫式部の『源氏物語』は、かな文字で書かれた全54巻の、そして日本最古の長編小説であり、平安時代のみならず日本文学史上でも最高傑作であると評されている。主人公の光源氏は、美男で才能と地位に恵まれた青年貴族であり、彼と宮中の様々な女性との恋の遍歴が、宮中の華やかな生活や人物の細かな感情の動きとともに端正に描かれている。『源氏物語』は全巻完成以前から貴族たちのあいだで評判となり、筆写されて多くの読者を獲得していた。また、『源氏物語』と同時代の作品に、清少納言によって書かれた『枕草子』がある。これもかな文字を用いた随筆であり、四季折々に移り変わる自然をめぐる情感や、宮中のできごとが生き活きと描かれている。

漢文が正統な言語としてハイカルチャーの地位を占めていた時代に、これらの女性たちが「流行作家」として登場した。彼女たちは、漢文や和歌の素養を縦横に駆使しながら、貴族階級に属する読者を熱狂させる先進的かつ繊細な文章を、読者に親しみやすいかな文字で綴り、新たな日本語の文体を生み出したのである。貴族というごく限られた読者を対象にし、宮廷という狭い空間を舞台にしたものとはいえ、こうした女流文学は、平易かつ新鮮な表現を用いて読者の日々の関心や情景、生活様式や理想をリアルに描き出し、直接的に読み手の感性に訴えかけたという点で、先述した江戸時代の町人文化に通じるものがあるといえる。そこには、書き手が新たな表現手段でもって読み手の感性をリードしつつ、同時に読み手のニーズを察知し、それを表現内容に盛り込むことで支持を集めるといって、ポップカルチャーに特有の相互作用が生じているのである。そして、『源氏物語』に表されている「物のあはれ」と、それを観照する感性こそが、日本人に固有の文化的感性であると論じたのが本居宣長であった。

4. 本居宣長の「物のあはれ」論

(1) 『源氏物語』と「物のあはれ」

宣長が貴人のあいだの恋愛模様や日々の情景をかな文字で描き出す平安時代

の女流文学を日本の文化的感性の源泉とみなしたのは、そこに彼特有の問題意識があったからである。江戸時代の支配的な思想や学問は中国伝来の儒学、特に朱子学を中心としたものであり、支配者集団の文化の核を形成していたのも儒学であった。支配階層に属さない市井の学者であった宣長は、儒学者の追求する男性的で厳格で理知的な精神的態度を日本文化に異質なものとして退け、それとは異なる精神的基盤を明らかにするの必要を感じていた。そこで彼は『古事記』や『源氏物語』に眼を向けたのである。そして、『源氏物語』の主題であると同時に、後代に受け継がれて日本固有の文化的感性を伝統的に規定したのものとして宣長が見出したのが、「物のあはれ」であった。以下、宣長の「物のあはれ」論を詳述する。

物ノアハレヲ知ルガ、即チ人ノ心ノアル也、物ノアハレヲ知ラヌガ、即チ人ノ心ノナキナレバ、人ノ情ノアルナシハ、只物ノアハレヲ知ルト知ラヌニテ侍レバ、此、アハレハ、ツネニタダアハレトバカリ心得キルママニテハ、センナクヤ侍ン⁵

ここで宣長は端的に「物ノアハレヲ知ル」人こそが「人ノ心」そして「人ノ情」をもつ人であるとしている。では、「物ノアハレヲ知ル」とはいかなることか。宣長は以下のように述べる。

事にふれてそのうれしきかなしき事の心をわきまへしるを、物のあはれをしるといふ也。その事の心をしらぬときは、うれしき事もなくかなしき事もなければ、心に思ふ事なし。思ふ事なくては、歌はいでこぬ也⁶。

宣長は「物のあはれ」を知ることとは、「事の心」すなわち事の本質を悟り知ることだとする。この「事の心」の意味内容はもちろん重要であるが、しかしそれよりも重視されているのは、人に「事の心」を理解する能力が備わっていることである。この能力がなければ、人の内面に「うれしき事も…かなしき事も」生じてこないからである。そして、この「事の心」を理解し、「物のあはれ」を知る能力は、人によって大小があるものの、すべての人に備わっていると宣長は言う。

その人の中にも浅深有て、ふかく物のあはれをしる人にくらぶるときは、むげに物のあはれしらぬやうに思はるる人も有て、大に異なる故に、常には物のあはれしらぬといふ人もおほき也。是はまことにしらぬにはあらず、深きとあさきとのけぢめなり。さて歌はそのものの哀れをしる事の深き中よりいでくるなり⁷。

歌は、人がより深く「物のあはれ」を知ることから生み出されてくるものである。さらにまた、物語も同様に「物のあはれ」知ることにより生まれ、それゆえ両者は同一のものであるとされる。

歌は物のあはれをしるよりいてき、又物の哀は歌を見るよりしる事有、此物語は物のあはれをしるよりかきいてて、又物のあはれは此物語を見てしることおほかるへし、されは歌と物語と其おもむき一ツ也⁸。

歌と物語はどちらも「物のあはれ」を知ることから生み出されるが、同時に人は歌や物語を読むことによって「物のあはれ」を知ることができる。そして『源氏物語』はすぐれて「物のあはれ」を示した物語であり、そこにおける「よき人」とは「物のあはれをしる」人を意味しているのである。

「物のあはれ」を感得することを通じて物事の本質に迫るということは人にとってきわめて重要ではあるのだが、しかし、その営為は無作為なものであってはならない。人にとって真に価値あるもの、望ましいもの、人の心を真に感動させるものを選択し、取得する営みを通じてこそ、人は「物のあはれ」を知る風雅な生き方をみずからのものにすることができる。そうでなければ人はいたずらに「物のあはれの海」に漂うことになるであろう。この点でも『源氏物語』はきわめてすぐれた物語である。それは人が取得すべき価値あるものを示しているからである。『源氏物語玉の小櫛』で宣長は以下のように述べる。

さて人の心の、物に感ずることは、上にもいへるごとく、さまざまなるを、此物語は、殊に人の感ずべきことのかぎり、さまざまかきあらはして、あはれを見せたるものなり⁹。

宣長にとって『源氏物語』は、人の心が外界の多くの事物に触れてさまざま

に動くさまを「さまざまなる」ままに、すなわち無選択的に描き出したものではない。『源氏物語』は、「殊に」人が感じるべきもの、すなわち真に観照の価値あるものを、「さまざまかきあらはし」たものである。それは具体的には以下のようなものと宣長は述べる。

まづおほやけわたくし、おもしろくめでたく、いかめしき事のかぎりをかき、又春夏秋冬をりをりの、花鳥月雪のたぐひを、おかしきさまに書あらはせるなど、これみな人の心をうごかし、あはれと思はする物にて、心に思ふ事ある時は、殊に空のけしき木草の色も、あはれをもよほすくさはひとなるわざ也。(中略) 又人のかほかたちのよきに感ずることはきりつぽの巻云(中略) 又人の品位に感ずることも、巻々に多く見えたり¹⁰。

すなわち『源氏物語』は、朝廷の公の行事や貴族たちの私的な営みのなかでも趣があり立派なものを選んで描き出し、また四季折々の風流な情景や、すぐれた容姿や品位をもつ人びとを描くことで、「物のあはれ」を見出すべき対象を読者に示しているのである。

(2) 「真心」と「女々しさ」

さらに宣長は、物に「あはれ」を感じ取ることのできる人は「真心」をもつ人のことだとする。「真心」とは、神から与えられた人のありのままの心のことである。宣長によれば、このような「真心」は、当然に自然な諸々の欲望をも含むものである。『玉勝間』において宣長は以下のように述べる。

うまき物くはまほしく、よきゝぬきまほしく、よき家にすまほしく、たからえまほしく、人にたふとまれまほしく、いのちながゝらまほしくするは、みな人の真心也¹¹。

美味しいものを食べたい、美しい服を着たい、良い家に住みたい、宝が欲しい、人に尊敬されたい、長生きしたい、といった様々な欲望は、すべて人の「真心」である。こうした人の「真」の心情は、雄々しく禁欲的なものとはかけ離れている。宣長が「まことの心の、めめしきをば¹²」と記したように、人のありのままの心は、日常的な欲望を受け入れるという意味で「女々しい」もので

ある。そしてそれが「女々しい」と表現されたのは、意識的に自身の欲望を統制しようとする男性的な儒教的心性に対する批判が含意されていたからにほかならない。

「真心」をもって「物のあはれ」を感得しようとすることも、やはり本質的には受動的な対応とみなされるべきものである。だが、前述したように、この受動的対応は、外界の事物を単に無選択的に受容するものではなく、「真心」がよしとするものを受け入れると言う意味で選択を伴った受容であることが注意されねばならない。このような柔軟な感性こそが古来より日本人に特有のものであって、対して儒教的な心性はそれを歪めて「悪人」をつくりだすものである、と宣長は厳しく批判する。

大かた神は、物事大やうに、ゆるざるゝ事は、大抵はゆるして、世ノ人のゆるやかに打とけて楽しむを、よろこばせたまふことなれば、さのみくもざる者までを、なほきびしくをしふべきことにはあらず。さやうに人の身のおこなひを、あまり瑣細にただして、窮屈にするは、皇神たちの御心にかなはぬこと故、おほくは悪くのみなることなり。かやうの教の瑣細なる唐戎の国などは、邪智深く姦悪なる者、殊に多くして、世々に国治まりがたきを以て、その験を見るべし。然るに此道理をしらずして、惣躰の人を、きびしくをしへたてゝ、悉にすぐれたる悪人ばかりになさんとするは、かの唐戎風の強事にして¹³

人びとが生まれつきの、素直な心でもって、外界の事物に接し、その動勢を受け入れ、それに従うとき、いいかえれば、儒教が説く知恵や道徳的リゴリズム¹⁴を捨てて外界に対応するとき、人の世は「ゆるやかに打とけて楽し」い、「窮屈」さのない望ましい状態になる。これに対して、儒教の盛んな「唐戎の国」には「邪智深く姦悪なる者」が多いがゆえに、国を治めることができいないと宣長は述べるのである。少なくとも支配階層である武士のあいだではリゴスティックな儒教的精神が定着していた徳川社会において、宣長のこの主張は、まさに画期的なものであった¹⁵。

以上で明らかになったように、宣長の問題意識は、まずもって当時においてハイカルチャーの地位を占めていた儒教の思想と学問に対し、根本的な批判を加えることにあった。だが、その際に彼が依拠した「物のあはれ」論は、日本

人の文化的感性と美意識を理論的に解明し、定式化したものとなった。すぐれた歌や物語は「物のあはれ」を知ることによって生まれるのだが、同時にそうした作品は人びとの「真心」すなわち自然のままの感性に訴えかけ、そうした感性をより鍛えていく。すぐれた作品の魅力は、したがって、決してそこに何かしら高尚で深遠なテーマが隠されているからではなく、それが日常的に人びとの抱く関心や興味を素材にして人びとの感性を刺激することにある。人びとの関心や欲求は時代とともに変わっていき、以前には新鮮であった表現は次第に廃れるであろうが、その時代ごとに人びとの感性を刺激する表現は絶え間なく生まれ続けていく。このような文化の受容と供給の相互作用こそが、現代日本のポップカルチャーにまで続く、日本文化の基底なのである。

5. 結びに代えて

本論はまず、ポップカルチャーには商品経済の発達を背景に不特定多数の人びとに商品として消費されるものという側面と、そのコンテンツは直接的に人びとの感性に訴える新鮮な表現を有しているという側面があることを指摘したうえで、江戸時代の元禄文化に、形式的にも内容的にも日本のポップカルチャーの原点があると論じた。本居宣長は、元禄文化が終焉してからかなり後になって生まれ、むしろ彼の晩年には化政文化が始まりつつあったのだが、日本人に特有の文化的感性を探求し、それは平安時代の女流文学、特に紫式部の『源氏物語』に顕著に認められるとした。宣長が『源氏物語』を選んだ意図としては、その内容の「女々しさ」を称揚することが、宣長の生きた江戸時代の幕藩体制において支配的であった儒教を批判するに有効であったからといえる。

宣長が『源氏物語』を通じて発見し、定式化した「物のあはれ」は、習熟の難しいハイカルチャーを構成するものというよりも、人びとの日常的な情感や欲求を基盤とするものであった。そうした人びとの感性が時代ごとに変わっていくにしたがって、「物のあはれ」を知らせる「女々しい」歌や物語の形式や表現も更新されていく。現代日本においてマンガやアニメなどのポップカルチャーの愛好者が、「オタク」という少なくとも雄々しいとは言えない呼び名をもつことは決して偶然ではないだろう。それは、どちらかというとき暗い印象を与える言葉であるが、しかしそこにあるのは、宣長にしたがえばむしろ「女々しく」あることによって自由で窮屈のない表現の世界である。そして、それゆ

えに、現代日本のポップカルチャーは、日本固有の文化的感性を超えて、いまや世界的に若者たちの共感を集めているのではないだろうか。

注

1. Malari は、LiMA beLAs JanuaRI (1月15日) の略で、ジャカルタでの反日暴動である。インドネシアでは学生たちが日本企業の進出を批判して、田中角栄首相の訪問の際にこの暴動を起こした。
2. 国際交流基金は、1972年に外務省所管の特殊法人として設立され、2003年10月1日に独立行政法人となった。国内に本部(東京・新宿)と京都支部、2つの附属機関(日本語国際センターおよび関西国際センター)、海外21カ国に22の海外拠点を持っている。文化芸術交流、海外における日本語教育および日本研究・知的交流の3つを主要活動分野としている。
<http://www.jpf.go.jp/j/about/index.html>
3. 外務省審議会等、「ポップカルチャーの文化外交における活用」に関する報告(ポップカルチャー専門部会)、2006(www.mofa.go.jp/mofaj/annai/shingikai/..05hokoku.html)。
4. 加藤周一『日本文学史序説(下)』(平凡社、1980年)、5頁参照。また、網野善彦によれば、江戸幕藩体制というのは、「町や村の人たちの中に文字がつかえる人がいることを前提にした体制」なのであり、それゆえ当時の日本は「おそらく世界の中でも非常に特異な国家」であった。網野善彦『日本の歴史をよみなおす』(筑摩書房、1995年)、37頁。
5. 『安波礼弁』(『本居宣長全集〈第4巻〉』(筑摩書房、1969年))、58頁。
6. 同、100頁。
7. 同、100頁。
8. 同、79頁。
9. 『源氏物語玉の小櫛』2の巻(『本居宣長全集(第4巻)』(筑摩書房、1969年)、203頁。
10. 同、203頁。
11. 「玉勝間」『本居宣長全集第1巻』(筑摩書房、1968年)、136頁。
12. 同、321頁。

13. 『玉くしげ』、345 頁。
14. リゴリズムは、厳格主義と訳される。一般には規則、特に道徳的規則の厳守を主張する立場を総称し、禁欲主義や修道生活などをもち。厳密には次の2つの立場をいう。まず17－18世紀の道徳問題決議論で神や教会の法を最も厳密に解釈する倫理神学者の立場。オランダでジャンセニストが蓋然論者に対する厳格主義者と呼ばれたのがこの言葉の初めとされる。もう1つはカントの実践哲学の立場で、道徳法則を尊重し、神や人に対する曖や嫌悪などではなく、ただ法則への尊重の念からそれを遵守することを求めること。カントはこれを禁欲主義や苦行と区別している（『ブリタニカ国際大百科事典』）。
15. 源了園『徳川合理思想の系譜』（中央公論社、1972年）、122頁参照。

参考文献

一次資料

- 『本居宣長全集第1巻』（『玉勝間』）、筑摩書房、1968年。
『本居宣長全集第2巻』（『排蘆小舟』宝暦7（1757）年、『石上私淑言』宝暦13（1763）年、筑摩書房、1968年。
『本居宣長全集第4巻』（『安波礼弁』宝暦8（1758）年、『紫文要領』宝暦13（1763）年、『源氏物語玉の小櫛』寛政8（1796）年）、筑摩書房、1969年。
『本居宣長全集第8巻』（『玉くしげ』、『くず花』）、筑摩書房、1972年。

二次資料

- 網野善彦、『続・日本の歴史をよみなおす』、ちくまプリマーブックス、1996年。
網野善彦、『日本の歴史をよみなおす』、筑摩書房、2008年。
新井正義、『図説学習日本の歴史4』、旺文社、1979年。
石田一郎編、『体系日本史叢書－日本思想史II』、山川出版社、1976年。
加藤周一、『日本文学史序説（下）』、平凡社、1980年。
川瀬一馬、『日本文化史』、講談社学術文庫、1978年。
岸上康久編集委員、『Story 日本の歴史－古代、中世、近世史編』、山川出版社、2001年。

田中英道、『歴史のかたちー日本の美』、三晃院別株式会社、2001年。
辻達也、『江戸時代を考える』、中公新書、1988年。
ドナルド・キーン『日本文学史ー近世編2』、中央公論新社、2011年。
守屋毅、『元禄文化ー遊芸・悪所・芝居』、講談社学術文庫、2011年。
鈴木伸一、『アニメが世界をつなぐ』、岩波ジュニア新書、2008年。
Schodt, Frederik L., The World of Japanese Comics, Kodansha
International, 1983.

